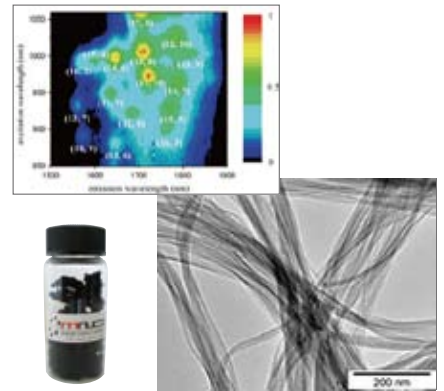


株式会社名城ナノカーボン



代表取締役 橋本 剛氏

名城大学の飯島澄男教授が1991年に発見したカーボンナノチューブは、21世紀のナノテクノロジーを支える注目のキー素材といわれています。私はこれに着目し、高品質のカーボンナノチューブを製造販売する会社を名城大学とともに立ち上げました。



単層カーボンナノチューブ(SWNT SO / Purified)

2005年に名城大学との産学連携で起業した当社は、高品質のカーボンナノチューブを公的機関や民間企業の研究部門に提供する会社として、現在日本で唯一の存在となっています。

じつは私、大学卒業後、銀行勤めをしており、いずれ起業する強い意志を持っており、まず銀行員として幅広く経営者に接し、将来のビジネスの参考にしようという意図でした。そしてこれまでにない画期的な技術に根ざしたベンチャービジネスを模索していた

時、カーボンナノチューブの発見者が名城大学の飯島教授だと知り、大きな衝撃を受けました。こんな身近にすごい方がいらっしゃるなら、ぜひお会いしたい！

大学は敷居が高いと思っていましたが、事務局に問い合わせしてみると、「直接研究室に行ってみましょうか?」と、研究者を紹介していただき、とても気さくでした。この時から安藤教授とのおつきあいが始まり、勤めが終わった夜間や日曜日に研究室に通う日々が始まりました。

高品質のカーボンナノチューブを大量に作るのは非常に難しいのですが、名城大学にはその技術があります。これを世界に知らしめ、役立てていただくために、安藤教授と一緒に会社を立ち上げることができました。

小さな資本で製造設備すら持っていない状態でしたが、科学技術コーディネータの方から、製造に関わる企業を紹介いただき、装置を作ることもできました。このように個別の案件ごとにきめ細かくアシストしていただけるのが名城大学の特徴だと思います。



名城大学
理工学部長
安藤 義則 教授
開発した高結晶性単層カーボンナノチューブの製造技術をもとに、05年4月大学発ベンチャー「株式会社名城ナノカーボン」を設立、取締役に就任。
専門は結晶物理学、固体物性学。

名城大学の研究室で作られたカーボンナノチューブが、今回の起業によって他の公的機関や民間企業の研究部門に販売されるようになったのは感慨深いことです。産学連携で培ったノウハウがうまく活用され、今後社会で役に立つ使い方がどんどん開発されていくことが私の一番の願いです。

そのために、応用研究の課題や会社の方向性に関する問題など、いろいろな相談にも応じています。名城大学の学生にとっても、カーボンナノチューブを応用してどうことができるのか、新しい使い道を探る最先端の研究ができるので、今後の人材育成が楽しみです。

カーボンナノチューブとは?

「カーボンナノチューブ」は、直径がナノメートル(10億分の1メートル)クラスの髪の毛の1万分の1ほどの炭素原子のみからなる筒状物質です。鋼鉄の数十倍の強さ、どれだけ曲げても折れないしなやかさ、薬品にも強く、銀よりも電気を通し、ダイヤモンドよりも優れた熱伝導など、「ナノ」の世界では量子効果と呼ばれる特異な現象が起こり、それを利用した様々な用途が生まれつつあります。このカーボンナノチューブを1991年に世界で初めて発見したのが名城大学の飯島澄男教授です。飯島教授のカーボンナノチューブ発見の元となった試料は、安藤義則教授が黒鉛棒を直流アーク放電で蒸発させ、フラウン作製していた時の副生成物陰極堆積物でした。現在では「高輝度光源用電子源」や「透明伝導性薄膜」、「フレキシブルトランジスタ」などに使われようとしており、様々な分野から注目されている物質なのです。



名城大学
大学院 理工学研究科
飯島 澄男 教授

